ゆにさん 訪問記

番外編

富士から箱根へ そして真情の世界へ

大橋 しのぶ

富士（宮下）古文書と徐福

「富士は日本一の山」と言いますが、日本らしい風景として最も多くの人が挙げるのが、富士山の美しい姿ではないでしょうか。二〇一三年には「富士山信仰の対象と芸術の源泉」の名で世界文化遺産に登録されました。

そんな日本の象徴とも言える富士山ですが、驚く事に日本の正史とされる『古事記』や『日本書記』にはその存在がまったく取り上げられていない事をご存じでしょうか？古代から富士山の存在が西日本にも知れ渡っていた事は、万葉集に下記の有名な富士山の歌が詠まれている事からも明らかです。

田子の浦ゆ　うち出でてみれば
真白にそ　富士の高嶺に
雪は降りける
山部赤人

そしてその古代よりさらに昔の超古代、その富士の裾野に「富士高天原王朝」と呼ばれる幻の王朝があった事を知る人もあまり多くないのではないでしょうか。

その王朝の歴史を記した古文書は『富士古文書』、またの名を『宮下文書』と呼ばれ、中国・秦から渡来した徐福が筆録したと伝えられています。

なぜ『宮下文書』と呼ばれているかと言うと、富士山の北麓にあたる山梨県富士吉田市大明見（旧南都留郡明見村）にある旧家・宮下家が代々、守り伝えて来た古文書であるからです。

まほろばのお客様ならご存知の方も多いと思いますが、宮下社長はこの宮下家の家系の方でいらっしゃいます。

大正時代、宮下社長の御祖父様はこの富士山麓の明見村から新天地の北海道へ、立志を抱いて移住して行きました。

それから約百年を経た二〇〇六年四月、宮下社長は戸籍を頼りにルーツを探し、明見村の宮下一族の方達と巡り合う事ができました。

詳しくは宮下社長の著書『倭詩』や、まほろばだより『エリクサーから無限心へ～中の章～』をご覧ください。時を超えて父祖の地に辿り着き、同族の方々との邂逅を果たした宮下社長の感動が伝わってきます。

その『富士古文書』を書いたとされる徐福とは、今から約二千二百年前、中国を統一した秦の始皇帝に仕えていた方士です。「方士」とは呪術、祈祷、薬剤、占星術、天文学に秀でた方術の士という意味であり、神仙の術を身

（財）新宮徐福協会 HP より

に着けた士として「道士」とも呼ばれました。徐福はさらに儒・佛・道教も修めた学者であり、政治の中核を担っていた政治家でもあったようです。

徐福は始皇帝の命により不老不死の仙薬を求め、多くの財宝と二千人の善男善女を引き連れて船出をし、東方の桃源郷（日本）にある蓬莱山に向かったまま帰らなかったと言われています。

徐福伝説は日本各地にありますが、蓬莱山は富士山であると考えられる事と、宮下文書の存在もあり、やはり徐福は最終的には富士山の周辺に辿り着いたという説が最も有力なのではないでしょうか。

もっとも二千人が八十五艘に分乗した大船団は途中嵐などでバラバラになってしまったらしいので、その人達が日本各地に流れ着き、それぞれがその地の徐福伝説となって伝わっている可能性も大いにあると思います。

さて徐福が富士山に辿り着いてより、度重なる中国などの外寇から日本を防備するため、「富士高天原王朝」の中枢は九州・高千穂や大和に移っていて、富士山周辺には残留した人々がひっそりと暮らしていたようです。

そこで徐福やその子孫達が、残っていた人々からその王朝の歴史を聞いて書き残したものがいわゆる『富士（宮下）古文書』です。

伝説によると徐福はその後その地の王となりますが、後年やはり富士山の大噴火により、徐福王国の多くの人々は主に東の方（今の神奈川県）に逃げて行きました。

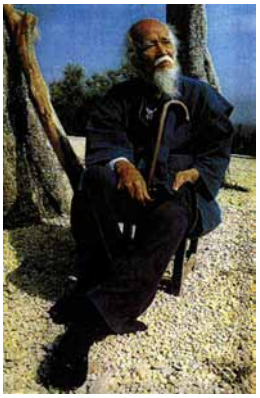
宮下文書に見入る森下敬一博士

神奈川県の中ほどには秦野という地がありますが、これも秦から渡って来た徐福一行が移り住んだ事が由来のようです。京都には太秦という地がありますが、こちらは徐福一行が富士山に辿り着く前に滞在し、一族の一部を残して行ったのが地名の由来だという説があります。

その秦野市から東に約十キロ程行くと寒川神社という相模の国の一ノ宮があります。そこには逃げて来た人々が『富士古文書』の一部分を託し保管してもらっていたそうで、それは『寒川文書』と呼ばれていました。しかし残念な事にその文書は後年水害により流されてしまったようです。

また富士吉田市付近から神奈川県の大山・丹沢山系にかけて道志村があり、道志川という川が流れています。この「道志」という名の由来も「道士」であった徐福一族が関係しているという説があり、富士山の大噴火の際にはかなりの人数がこの道志川に沿って神奈川県の大山や寒川方面に逃げて行ったという事です。

相模の国の一ノ宮寒川神社



故・福岡正信先生も徐福の子孫代表として招かれていたそうです。

神奈川県藤沢市妙善寺にある徐福ゆかりの石碑。

徐福の子孫は長男の家系が福岡、二男が福島、三男が福山、四男が福田を「氏」として継承し「秦」を姓としたそうです。

神奈川県藤沢市妙善寺にある「福岡家」の墓所には立派な石碑が立ち、裏側には、自分達は始皇帝の圧政から逃れ秦から渡って来た徐福の子孫で、富士山麓から移って来たという内容が刻まれています。

石が剥離している箇所もありますが、「徐福」「富士山」「福岡」などの文字がはっきりと見てとれます。

先ほども書きましたが富士古文書は宮下社長の父方の家系が守っていた文書であり、その状況や経緯から当然宮下家にも徐福一族の血が入っていると思われます。

ちなみに日中合作歌劇『蓬莱の国～始皇帝と徐福』では、その子孫代表として、あの自然農法の大家　故・福岡正信翁が招かれたそうです。まほろばの宮下代表と福岡氏はもともと自然農法を通じて何十年来の交流があったとの事、これも徐福の子孫同志のご縁があったのだろうかと宮下社長は驚いたそうです。

私がこんなに徐福の事を知る事になったのはまだここ数か月の事です。この五月から宮下社長の母方のルーツ探しのお手伝いをしているうちに、自然と父方のお話を聞く事も増え、もともと古史古伝の類に興味があったので富士古文書や徐福の本を読んでみました。

すると驚いた事に、地元・神奈川県は徐福伝説の宝庫のような地である事が分かってきたのです。

毎日ベランダから眺めていた富士山、その右側には大山や丹沢山系の稜線が美しく幾重にも連なり、左側には天下の険と呼ばれる箱根が赤や黄金色の夕日を抱いて日々違う色に輝きます。そしてたびたび訪れていた寒川神社、さらに毎日のように前を通り過ぎていた妙善寺、それらにこんなにも徐福伝説が関わっているなんて本当に思いもよりませんでした。

箱根神社参拝セミナー

そんな頃、十月三一日から十一月一日にかけて、箱根にて『北極流・箱根神社参拝セミナー』が開催される事を知りました。講師は北極流占い継承者の羽賀ヒカルさん。

箱根神社の参拝セミナーは二〇一二年九月の開催から約三年ぶりです。箱根神社は地元・神奈川県の神社である事や、前回は引越し等で参加できなかったので、

ずっと開催を心待ちにしていました。

今回の主催者は東京の〝健康まなび家〟さん、「健康でしあわせに生きるための知恵」に関する様々なセミナーを開催されています。今回のセミナー内容は主に下表との事（※健康まなび家さんHPより）。

真ん中の項目に『その昔存在した国「富士箱根王朝」について』とあり、更に期待が高まります。

羽賀ヒカルさんの一〇月二〇日のブログにはこんな事が書かれていました。

※前略

「これからの時代は富士と箱根のラインで大きなエネルギーが動く」と書きましたが、理由はあります。

「富士は霊的には動いている」ということ。

言い換えると…

「富士の復活」です。

太古の昔…富士には王朝がありました。（もはや、何万年も昔のことですが）神武天皇以前の天皇がそこにいたということです。

その王朝を「富士王朝」といいます。

そのことが記された文献が『宮下文書（富士古文書）』です。

先月、宮下文書を継承する家系の宮下さんとお会いしたことも無関係では無いでしょう。

今まで、富士王朝は封印されていたのですが、いよいよ、その本当の霊的な働きが目覚めつつあるということです。

その働きが正しく目覚めればよいのですが、もし、それがうまくいかなければ富士を中心とした災害に繋がるという大きな転換期に来ています。

そして「富士」と表裏一体の関係にあるのが「箱根」です。

これからの時代の鍵を握る神社の一つといってよいでしょう。

※後略

いったい富士王朝の何が封印されていて、何が目覚めつつあるのでしょか？「地震のエネルギーを霊的覚醒に変えるための祈り」にも非常に興味があります。

と、いう訳でかなり前置きが長くなりましたが、まるで徐福さんに導かれるように参加して参りました、北極流・箱根神社参拝セミナー二〇一五年の感想を、二〇一二年のセミナー内容と一緒に（書いても支障の無いと思われる範囲で）ご報告させていただきたいと思います。

まず二〇一二年の参拝セミナー（ＤＶＤ）でとても印象深かったのは富士と箱根は「富士箱根神仙界」として表裏一体の関係であり常に一緒に動いているということ。そして日本にある数々の神霊界の中でも非常に高い神々の世界と繋がっている境目の場所だということでした。地質学的に見ても富士は地球を構成している大きな３つのプレートの上にあり、まさに地球規模の境目にそびえている山という事になります。そしてそういう境目、いわゆる境界線には霊的に膨大なエネルギーが流れているそうです。

そしてその例として「リーマン予想」と「天地明察」を提示しているのが大変興味深かったです。

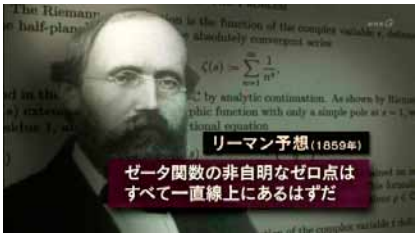
「リーマン予想」というのは、ざっくりと言うと、まだ解けていない素数の法則の事です。素数は「神の暗号」とも呼ばれ、多くの天才数学者がその法則性を発見しようと挑んだものの、今現在も解読できていない数学史上最大の難問です。これが解けた時は宇宙全ての謎が解けるとまで言う科学者もいます。

＜セミナー内容＞

- **知って参拝するのと知らずに参拝するのとでは全く違う神社参拝の秘訣**
- **そもそも神社とはどういう場所か？なぜ、神社参拝で人生が変わるのか？**
- **誰も知らない箱根神社に隠された秘密。**
- **仙人たちが済む世界だった「富士箱根神仙界」**
- **その昔存在した国「富士箱根王朝」について**
- **箱根神社の神様のエネルギーをより多くいただく祈りと生き方。**
- **すべての地震の元となる「富士箱根」**
- **地震のエネルギーに隠された秘密**
- **地震のエネルギーを霊的覚醒に変えるための祈り方**

リーマン予想が解けようが解けまいが、実生活には何の関係もないと思う人もいるかもしれませんが、実はリーマン予想が解けていないからこそ我々の生活が守られているという側面があるのです。

例えば我々が普段使っているクレジットカードの情報は不特定の素数を元に暗号化しているので、素数の法則が解読されたら、しばらくは経済が大混乱に陥ってしまうでしょうし、万が一悪人の手に渡ってしまったら大きな犯罪に繋がってしまう可能性もあります。



「リーマン予想」に興味のある方は、二〇〇九年にＮＨＫハイビジョン特集で放送された『素数の魔力に囚（とら）われた人々 リーマン予想・天才たちの一五〇年の闘い』をご覧になって下さい。ＮＨＫオンデマンド等で見る事ができます。

数学が苦手な私ですが、この番組は非常に面白く感じ、数学の素人にも分かり安くまとまっていると思いました。

当時この番組を見て私が思ったのは、素数の法則はまさに、目に見えるこの世と目に見えないあの世の狭間そのものに存在している法則なのではないかという事でした。そしてあるキーワードがないと永遠に解けない法則なのではないかと。

宮下社長と情緒の哲学

数学と言えば、まほろばの宮下社長は、とても文系の方のように見えますが、実は十代の頃から心の中で、大数学者の岡潔先生に私淑し、今日に至るまで心の中心に岡先生の存在があるそうです。

それは、

「数学は情緒なしには成立しない」

「この宇宙の核心は『情』である」

という岡先生の、「情緒の哲学」に強く惹かれたからでした。

数学者である方がきっぱりと「数学イコール情緒」とおっしゃっているのは興味深いですね。

もう少し詳しいところを、まほろばだより『エリクサーから無限心へ～前の章～Ｐ一二』にある、宮下社長の言葉より抜粋致します。

「岡先生に一五～一六歳から私淑して、今日まで五十年ほど心の中に岡先生の存在が離れない。数学は情緒なしには成立し得ない、と言われるその情緒こそ人生や自然や宇宙の核心だと信じているのですね。そして、宇宙の中心は真情であるとおっしゃっているのです。感情や感覚という薄っぺらなものではない。万古の時空の根底を貫くもの。サムシング・グレイトと我々は情の絆によって結ばれている。いのちの源であり、古来情操と呼ばれ、情緒と言われてきた日本文化の精神でもあるのですね。」

この岡先生の数学上の大発見は念仏三昧の行によって成されたという事です。

また今回のノーベル賞受賞者のお二人も大変謙虚で温情に溢れた方々とお見受けいたしました。

もしかして、心の器が整い真の情緒で宇宙と繋がった方々が、この境界線の世界に立ち入る事が許され、大いなる宇宙の法則を授かる事ができるのかもしれません（これからの時代は特に）。

箱根神社参拝セミナーでは、この事を「天之御中主（アメノミナカヌシ）」になる事だと表現していました。天之御中主は始まりを作る神様であり天文学用語で言うとビック・バンの事。

数学の難問やノーベル賞的な大発見でなくても、

「そうか、分かった！」

と宇宙の法則が一つ解けた時、人の心の中ではビック・バンが起き、新しい宇宙が誕生しているそうです。

そして北極流では毎日がアメノミナカヌシと合一するような人生を歩む事が大切だと説き、その具体的な感覚と方法を提示して下さっていました。

箱根神社の元宮参拝

さて箱根神社元宮の御祭神はその天之御中主様です。芦ノ湖畔からロープウェイに乗り約七分、駒ヶ岳の頂上に鎮座していらっしゃいました。こんなに近くに住みながら、今まで訪れる機会がなく、今回の参拝セミナーで初めてお参りさせていただく事となりました。

元宮の前まで登った時、その右手に広がる相模湾の絶景に息をのみました。

その時「ああ、そうだったんだ……」と何かが腑に落ちたような感覚に襲われ、すーっとした不思議な気持ちになりました。その感覚を抱いたまま、導師の羽賀ヒカルさんの先導に合わせて他の参加者の方々とご一緒に、元宮に参拝をさせていただきました。

その後はそれぞれ別れて、集合時間まで駒ヶ岳にて祈りの時間となりましたので、私は相模湾が一望できる場所に移って、先ほどの自分は一体何が腑に落ちたのかじっくりと感じてみる事にしました。

目の前にはいつも見ているのと反対の弧を描いて相模湾が広がっています。遠くには江の島がはっきりと見え、すると自分の住んでいる場所はあそこ、寒川神社はあのあたり、鎌倉の鶴岡八幡宮はあの山の向こう、とはっきり判別する事もできました。

そうか、私が知らなかっただけで、きっとあの時もこの時も天之御中主様はここから見守ってくれていたのだなあという感謝の気持ちと、まるで自分がアメノミナカヌシ様と合一して自分の人生を走馬灯のように眺めているような気持ちになりました。

またどうして自分がこの時代を選んで生まれて来て、今この地に住んでいるのかを思い出したような気もしました。

すると昨年の九月、京都の石清水八幡宮に見立てて参拝させていただいた、鎌倉・鶴岡八幡宮での誓いを思い起こしました。今日ここに立てたのも偶然ではないと思い、

「天之御中主様、今ここで再び誓わせて下さいませ。あの誓いを今後の人生で具現化していけますように、どうぞ引き続きここからお見守り下さい、お導き下さい。」

とお祈りしました。

するとすっきりと気持ちが落ち着いたので、今度は後ろを振り返ってみました。相模湾の反対側には、富士山本体こそ雲に隠れて見えないものの、その裾野が大きく近くまで広がっていました。

「これは富士山が噴火した時には、さぞかし徐福国の人々は神奈川方面に逃げて来ただろうなあ」

と思いました。相模湾から左の陸地側に目線を転じると、秦野や大山、道志川を抱く山々も見えます。

本当にこんな近くで富士山が大爆発したらどんなに恐ろしかった事でしょう。人々が家財道具や衣類を手車に載せ、先祖の書物や遺物を布に包み首に巻いて、川沿いや海沿いを逃げてゆく光景が見えたような気がしました。

関東や東北の人口の二～三割は徐福の血を引く人々だという説もあります。私の父は福島県福島市の出身で、福島の語源となった故郷の信夫山（しのぶやま）から私の名前を付けました。

「福島」は徐福の二男の氏名でもあり、また父は二〇年以上前にこの神奈川県で他界しましたが、偶然にも福岡家の墓所がある、前述した妙善寺で葬儀を執り行ったのにも、徐福との不思議なご縁を感じるのはちょっとこじつけ過ぎでしょうか。

また前回のセミナーと今回でも羽賀ヒカルさんが取り上げていた『天地明察』という小説にも福島の会津が関わっています。会津若松は宮下社長と私の母方のルーツにも繋がり、『天地明察』も大好きな話なのでご紹介させていただきたいのですが、今回は割愛させていただき、いつか出雲大社参拝セミナー編でご紹介できたらと思っています。

箱根神社の里宮参拝

さてこの元宮参拝の前には箱根神社・里宮の早朝参拝がありました。

前夜の羽賀ヒカルさんのセミナーによると、芦ノ湖には五次元（神々）の世界からのパイプが降りているそうです。

そしてその湖畔にある箱根神社には何と、「霊的な徐福が神々の一柱として鎮座」しているそうなのです！

先ほども書きましたが、箱根は霊的には「富士箱根神仙界」と呼ばれる神仙の世界に属しているので、まさに方士であり道士である徐福さんにぴったりな場所だったのですね。徐福は始皇帝の圧政から逃げる為だけでなく、神仙としての修業の仕上げとして日本の富士山に来たかったのだそうです。

そして箱根は「箱船」にも通じるとのこと、本当に船に乗ってやってきた徐福さんにふさわしい地です。

またセミナーでは『現代語訳神皇紀』も取り上げられていました。

『神皇紀』はざっくり言うと、大正時代に三輪義熙氏が富士古文書を系統的に集大成した資料です。ただ明治・大正時代の文語文で記載されており読みにくい為、これを神奈川徐福研究会・神皇紀刊行部会の有志が現代語訳への翻訳を試み二〇一一年に『現代語訳神皇紀』として発行されました。

偶然にもこのセミナーの一週間前に、私は上京してきた宮下社長からお誘いいただき、横浜の中華街で『現代語訳神皇紀』の発行に関わった、神奈川徐福研究会のメンバーの方々と会食したばかりでした。神皇記の翻訳作業はまったく無償のボランティア活動だったそうですが、徐福を通じて日・中・韓三国が「徐福文化を世界遺産に登録する」共同事業の活動予定を実に楽しそうに語っていたのが印象的でした。

『神皇紀』は富士古文書のダイジェスト版のような存在ですが、今度は『富士古文書』中『徐福十二史談』の現代語翻訳作業が、来年一杯の完成を目指して続けられているそうです。

『神皇紀』まほろばでも販売しています。

今まで古事記や日本書記の陰に隠れるようにしていた『富士古文書』の存在がまた歴史的に大きく表に出ようとしているのでしょうか。

セミナーの最後には地震のエネルギーを霊的覚醒に変える九頭龍の祈りを教えていただきました。九頭龍も箱根神社の主要な御祭神です。この祈りを一人ひとりが日常生活の中で行う事が、富士山の噴火や地震などの天災を防ぐ一助となるそうです。

きっとこの九頭龍の祈りにも神々の一柱として徐福さんが係わっているのでしょう。

もしかして、前述した宮下文書やこういう祈りが開示されてきたという事自体が、今まで霊的に封印されていた富士王朝が目覚めるという事なのかもしれません。

朝の七時にホテルを出発した里宮の早朝参拝でしたが、参道も神社も芦ノ湖も本当に清々しく美しく、まるで中国の水墨画に出てくる仙人の世界のようでした。

今でもあの空気感を思い出すと、何だか何も食べないで生きていけそうな気にさえなります（もちろん食べますけど）。きっと霞だけを食べて生きていた仙人ってこんな美味しい〝気〟を食べていたのだろうなあと思える程、清々しい山水の気に満ち溢れていました。

一同で参拝をし、九頭龍の祈りをしてホテルに戻る途中、空にはまるで龍神様のような雲が幾つも現れていました。

そしてホテルに帰ると昨日は雲がかかっていた富士山がくっきりと現れていて、今度は水墨画というより、まるで水彩画のような美しさ。この早朝参拝の空気感を忘れないようにと、三〇分程中庭で一人、ぼーっとと富士山を眺めていました。

残念ながら今回のセミナーはDVDやCDの販売予定はないそうですが、境界線や富士箱根神仙界にご興味のある方はまず二〇一二年のDVDをご覧になってみて下さい。他にもここではご紹介しきれない程、興味深い内容が満載です。

更に霊的な徐福や富士箱根王朝、または占いにご興味のある方は、羽賀ヒカルさんの鑑定を受けに行ってみてはいかがでしょうか。

北極流占い継承者の羽賀ヒカルさんの鑑定室は、大阪府枚方市（ひらかたし）樟葉（くずは）の御食事ゆにわの近くにあり、まほろばの無限心球「結」も置いてあります。

「結」の誕生秘話については、まほろばだより『エリクサーから無限心へ～後の章～』をご覧下さい。

富士講と富士塚と心の世界

箱根神社参拝セミナーに話を戻します。あと今回の内容で心に残ったのは、

「繊細な波動の粒子（心）は、あっと言う間に空間を超えて伝わる」というお話でした。

今回も箱根神社参拝セミナーに参加しようと決めた時点で、その人の心と箱根神社は既に霊的な波動で繋がり始めているのだ、という事でした。

無限心球「結」

それを聞いて富士山繋がりで思い出したのが、江戸時代に庶民の間で大流行した富士講の事です。

江戸時代の人々は地域ごとにグループを作り、お金を積み立てその代表者を富士登山（富士詣）へと送り出しました。

代表者はクジで決められ、遅かれ早かれ全員が行けるシステムになっていたようです。

ただ代表者が行けば、残りのメンバーも富士詣でをしたのと同じ功徳があるとされたので、残ったメンバーは心を合わせ、代表者が無事に富士登山できるように祈願していたそうです。その祈りは空間を超えて代表者を守護するエネルギーになったでしょうし、きっと心の世界では皆で一緒に参拝しているからこそ、残っていた方にも功徳もあったその富士講と共に発展したのが「富士塚」です。

こちらは実際に富士山に登る事ができない女性や、老人子供、体力がない者が富士登山をできるようにと富士を模して作られた小山の事です。この富士塚に登る事によって本山に登るのと同じ功徳を得られるとされました。

これもきっと心の中で本当に富士山に登っているように感じる事で、心が空間を超えるという事なのでしょうね。

更に私が感じたのは、きっと「心」という波動は空間だけでなく時間さえも超える事が出来るのではないかということです。私は二〇一二年の箱根神社参拝セミナーに参加する事ができなかったので、そのDVDを見る時は、自分があたかもそこにいるような気持で見ていました。それは他のDVDや音声を聞くときもいつも一緒です。

ゆにわに行ってみたいけれどなかなか関西まで行けない、参拝セミナーに参加してみたいけれど様々な理由で行かれない、という方もいると思います。そういう方はまずはＤＶＤを見たりＣＤを聞きながら、心の世界で自分は本当にそこにいる！と感じてみてはいかがでしょうか。

真情（境界線）の世界

さて最後にもう一度、「リーマン予想」の話に戻らせて下さい。いったいリーマン予想を解く「鍵」とは何なのでしょうか。

まほろばだより『エリクサーから無限心へ ～前の章～ Ｐ十三』から、宮下社長の言葉を抜粋させていただきます。

「科学は再現性であり、法則性でもあります。その法則を見出すのが科学者でもある訳です。

数学も一つの公式定理を見出す。専門教育を受けなかったあのインドの天才数学者・ラマヌジャン。神秘的瞑想の中からカーリー神から公式を教えられたと言われます。

その公式は世界の学者が目を見張るほどの美しさに輝いている。厳然とした自然界の法則が、ついには美しさを伴いながら形を現わす。

真と美と善は一体のものなのです。情緒と知恵が融合すると、円満な心の安定が生まれる。

きっと宇宙は智の父性と情の母性から成り立っており、両者が相俟ったものが、古典といわれる生命を後代の人に伝えて行くのだと思うのです。」

私が最初にリーマン予想の番組を見た時には、ひょっとしてこの法則を解く鍵は〝愛〟なのではないかな？と思いました（もちろん〝愛〟の種類にもよると思いますが）。

後にこの宮下社長の文章も読ませていただき、最近では、数学の問題（リーマン予想を含む）を解く鍵はどうやら「情」、それも感情や感覚という薄っぺらいものではない「真情」というものなのではないかと思うようになりました。

偶然にも最近の北極流の方達のテーマは「**情の使い手になる**」ということだそうです。

それも「感情」や「同情」ではない、真に人を生かす「情」、つまり真情についてのお話しをされていました。

これからはそれ（真情）をテーマにしたセミナーも開催する予定だそうです。

北極流センテンクラブのメールマガジンを担当されている北極流一門の川嶋政輝さんのメルマガによると、

「これまで、一度もお伝えしたことのない、衝撃的な内容になりそうです。（私たち一門も、初めて踏み込む領域です）」とありました。

偶然か必然か最近私は北極流の方々の「真情」を垣間見るような機会がありました。改めて「すごいな、北極流とはこんなにも深く、こんなにも真剣に他人の事を思ってくれるのだ」と驚きました。

それも宮下社長が書かれているように、まさに「**智の父性と情の母性**」「**情緒と知恵**」を兼ね備えながら。そして「**情緒と知恵が融合すると、円満な心の安定が生まれる**」という言葉そのものを体現しているがごとくに。

思えば私はずっと長い間、間違った情の使い手として生きてきて、今から六年前にそんな人生を変えたいと思いたち環境を変えました。それからは新しい人生、新しい道を求め、がむしゃらに過去を振り払うように生きてきたような気がします。

北極流では幸せになる為の道として「**過去からではなく未来からの（幸福な）時間感覚で生きる**」という事を教えてくれています。

実践してきたつもりだったけれど、そうしてきたつもりだったけれど、まだまだだったなと思い、私もそろそろ本当に、過去を振り払うような人生を卒業して、本当の意味で未来からの時間感覚で生きる人になりたいと思いました。

そして出来るならば「**真の情の使い手**」になりたいとも。

私にとっても初めて踏み込む領域です。果たして本当に変わる事ができるのでしょうか。そしてそれはどんな世界なのでしょう。

未知の世界に思わず尻込みしそうになった時、恩人である故・寺田啓佐さんが生前に よくおっしゃっていた言葉が頭の中で聞こえてきました。

「大丈夫、人は何度でも生まれ変われるんだ」

「微生物達の生き方を見習えばいいんだよ。発酵とはずっと変わり続ける事なのだから」・・・と。

そして最近読み返していた、まほろばだより『エリクサーから無限心へ ～最終の章～』の最後のページにある、宮下社長が載せたある方のメッセージも目に飛び込んできました。

『そしてそれと共に何か心の深いところからとても繊細で精妙な囁きが聞こえてくるのです。その囁きは私にこう言います。

「この囁きを目印にしろ」

「この囁きから意識をそらすな」

と

そして「勇気を持って前進しろ」

と。

想像してみてください。遠い昔に行ったことのある とても懐かしい場所。』

そうなのです、出会っていないのならいざ知らず、知ってしまったなら人はその道を歩き出さずにはいられないものなのですね。そして私は見つけてしまったようです。

今まで起こった全ての出来事が私を今日ここまで運んできてくれました。

魂の深いところから聞こえてくるこの囁きに耳をふさぐ事なく、意識をそらすことなく、この囁きを目印にして、再び勇気を持って前進したいと思います。

未知の世界であり、そして 実は遠い昔に行ったことのある、あのとても懐かしい 場所へ……。

ここまで読んでいただいて、大変ありがとうございました。

改めまして、私に人生を変えるきっかけをくれ、発酵道を教えて下さった、寺田本家の故・寺田啓佐社長、「あなたの思いのたけを書いて下さい」と、おっしゃって下さったまほろばの宮下周平社長や編集長の島田浩さんにも、心より御礼申し上げます。

そして今まで出会った全ての方々、全ての出来事に、

真摯な祈りと感謝を込めて、

無限にありがとうございます。

二〇一五年十一月十一日

境界線の芦ノ湖畔にて

大橋 しのぶ

著者プロフィール

寺田本家 23 代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は 5 作になる。今年、まほろば社長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。